



筑摩世界文學大系

28

# バルザック

I

水野 亮 訳  
中島 健蔵



従妹ベット

知られざる傑作 赤い宿屋 ゴプセック

沙漠の情熱 恐怖時代の一挿話

「人間喜劇」序

筑摩書房

筑摩世界文學大系

28

昭和四十七年一月十日

初版第一刷発行

バルザック I

訳者代表

水野亮

発行者

竹之内静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一  
電話東京(二九一)七六五一  
振替口座東京四一―二二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20628 (出版社) 4604





バルザック  
I



## 従妹ベツト

——「貧しき縁者」第一話——

—

一八三八年の七月半ばのこと、そのころやつとパリの広小路に姿を見せはじめたばかりの、ミロールという新型の馬車が一台、大学通りを走っていた。乗っているのは、でっぷり肥った中背の男で、国民軍大尉の服をつけている。

パリっ子の、いやに才走った連中のなかには、ふだん着よりも軍服のほうがずっと男振りがよく見えると思ひこんでいるのがある。彼らの勝手な推測によれば、どうせ女好みなどは知れたものだから、ふかぶかとした黒毛帽やいかめしい軍装を見たら、まんざら悪い気はしないだろうというのである。

国民軍第二連隊づきの大尉は、いかにも得意そうな顔つきで、かなり下ぶくれのあから顔も満足げにかがやいていた。たんまり金をもうけて隠居した商人の額がちょうどそんなふうにかてか光っているところから、いずれパリの税務官か何かで、少なくとも昔は区の助役ぐらいは勤めたこともあるのだろうという当りのつく男だった。なるほどそういえば、プロシヤの軍

人式に勇ましく突き出た胸にはレジオン・ドヌール勲章の赤い綬いぶきがちやんとかかっている。レジオン・ドヌール勲章をつけたこの男は馬車の隅を選んで傲然とたまえ、ほんやり道行く人に眼を走らせていた。パリでしばしばそんなふうにあいにくとその場に居合わせない美人に向けられた愛想笑いを、通行人がかわってちようだいすることがある。

馬車は、大学通りがベルシヤス街とブルゴーニエ街のあいだにはさまれているところどまった。庭園づきの古い邸の中庭の一部分、つい近ごろ建った大きな家の入口だった。古い邸のほうはそっくり手をつけずにおいたので、半分ばかりせまくなった中庭の奥に今も昔のままのかたちで残っている。

御者に助けられて馬車からおりる大尉のかけうを見ただけでも、五十ぐらいの年配だという見当はよいにつくに相違ない。あらそわれないもので、いかにもたいぎそうな身振りやしぐさが、まるで出生証書のようにあけすけに年のほどをさらけ出すことがある。

大尉は黄色い手袋を右手にはめると、門番の男にはいさいかまわず『これは俺の家だ』といわんばかりに、いきなり邸の一階の階段へ歩みよった。

パリの門番たちは恐ろしく眼が利いているから、足どりのゆつたりした、青い軍服に勲章をつけている男などに、かりにもとめ立てをくわせるようなまねはしない。つまり金持というものをちゃんと知っているのである。

くだんの一階はユロ・デルヴィー男爵閣下が全部借りきって住んでいる。男爵は共和政治下の支払い命令官で、かつて陸軍主計監を勤めたこともあり、げんに陸軍省でもとくに重要な軍政方面の一局長として参事院議員、二等レジオン・ドヌール勲章佩用者等々の肩書をもっている。

ユロ男爵は、兄弟の有名なユロ將軍と間違われないように、生まれ故郷のデルヴィーの名をとってユロ・デルヴィーと名乗っていた。兄というのは、ナポレオン皇帝によって創設されたフォルツハイムの伯爵領を一八〇九年戦役のあとで皇帝から授かった元親衛軍擲弾兵大佐のことである。

弟の世話を引き受けた兄の伯爵は、父親らしい配慮から弟を軍政方面に向かわせたのであるが、兄弟二人して軍務にはげんだおかげで弟の男爵はナポレオンのお覚えもめでたく、またその特別の引き立てにあたいする手柄も立てたのであった。一八〇七年以来ユロ男爵はスペイン派遣軍の主計監になっていた。

町人あがりの大尉はベルを鳴らしてしまおうと、太鼓腹が突き出すたびに上着がだんだんと前もろしるもまくれあがってしまったのをもとどおりに直そうとして、いいかげん骨を折った。仕着せを着た一人の下男が、このいやにもつたいぶった男の姿を見かけるとさっそく招き入れて、先に立ちながら客間のドアをあけた。

「クルヴェルさまがお見えてございます」  
クルヴェルと名乗る男の風体をいかにもよく



現わしているその名前を聞くと、かっぶくのいい、ひどく若々しくて健康そうな、ブロードの髪の毛の女が、まるで電気にもうたれたようにびくつきとして立ちあがった。

「オルタンスや、ベットさんとお庭のほうへ行つてらっしゃい」と、彼女はそばで縫い取りをしている娘に、口ばやに声をかけた。

オルタンス・ユロ嬢は大尉にしとやかにえしやくをしてから、男爵夫人よりも五つばかり年下だけれどずつと老けて見えるやせぎすの老嬢と連れ立って、出入口から出ていった。

「あなたの結婚のお話よ」と、自分にとっては従姉の娘にあたるオルタンスの耳もとで、ベットはそうささやいた。そして娘ともども自分を外へ追いやろうとする男爵夫人の、人を人とも思わないやり口にも、かくべつ怒ったようなうすは見せなかつた。

もつともベットの身なりが身なりだから、男爵夫人の遠慮なさもなつとくできないわけではない。

黒みがかつたぶどう色の、メリノ羅紗メリノの着物であるが、その裁ち方といい、袖口や裾の襷飾りといい、王政復古時代のしろものである。縫取りの襟飾りはまず三フランというところ、青い縹あざ子の花結びをあしらった麦わら帽は中央市場の女商人ならざらにかぶっている。こしらえの工合からいってどうも路地裏のけちな靴屋のものらしい山羊皮の短靴をなにも知らない人が見たら、この親戚としてあいさつすることに二の足を踏むかもしれない。――まずどこから

見ても通いのお針婆さんといったかっこうだからである。ベットはしかしクルヴェル氏に愛想よく小腹をかかめてから出ていった。クルヴェル氏もちよつとかならずいてみせた。

「あすきてくださるでしような、フィッシュエルさん」

「お客さまがあるんでしよう？」

「なに、子供たちとあなたと、それっきりですがね」

「そう、それじゃきつとおうかがいしますわ」「お指図どおりまかり出ましたよ、奥さん」と国民軍の大尉はあらためてユロ男爵夫人にえしやくした。

そしてユロ夫人をじつと見つめたが、なんのことはないその眼つきは、ボワティエとかタータンスとかの田舎町を打つてまわる旅芝居のタルテュフ（モリエールの喜劇の主人公、偽善者、ペテン師の典型。エルミールは真淑な人妻）役者が自分の役柄をはつきり見物人へののみこませる必要上、思い入れよろしく相手役のエルミールをながめるときの色っぽい眼つきにそっくりだった。

「こちらへおいでくださいまし、こちらの部屋のほうがずつとお話もしいいと思えますから」と、アバルトマンの間取りからいって娯楽室になつている隣室を、ユロ夫人は指さした。

その部屋と、窓が庭のほうに向いている夫人の居間とは、ほんの薄い壁で仕切られているだけだった。ユロ夫人はちよつとのあいだクルヴェル氏をひとり娯楽室に残したまま出ていった。ひよつとして、自分の居間で立ち聞きなどされ

ては困るので、誰もはいってこれられないようにその窓やドアは締めておいたほうがいいと思つたのである。庭の奥のふるびた亭えんに坐つている娘と従妹に軽く笑つてみせながら、客間の出入口も同じように用心ぶかくしめてしまった。

けれど客間へ誰かはいってきたときにはそのドアのあくのが聞こえるようにというので、娯楽室のドアは開いたままにして戻ってきた。

男爵夫人はそんなふうに向つたり来たりしながら、べつだん誰からも見られていたわけではないので、心に思うことを顔にすつかり出していった。まったくそれは見たらびくつきりせずにはいられないほどの取り乱しようだった。けれど客間の入口から娯楽室へ戻つてくるじぶんには容易に心の底を見せない女らしい自制心がその顔色を隠してしまつた。もつとも女というものは、どんなにあけすけな性分の女でも、いざといえばそうさなくそういうつつましい顔つきになれるものらしい。

男爵夫人のいろいろな手くばりは少なくとも奇妙なものにちがいがなかつたが、そのあいだ国民軍の士官は、いまいる部屋の調度類をしろしろ見まわしていた。

もとはまっ赤だったのが日焼けで紫色にあせた絹のカーテンは、長年の使用で襷がところどころ切れかかっている。敷物は色がすつかり消えてしまつたし、椅子などの家具類もメッキがはげて、張つてある絹地はしみだらけで、縁飾りの紐いとのところがり切れている。そんなものを見てゆくうちに、軽蔑けいべつと満足と希望の表情が、

しごく単純なもので、つぎつぎとこの成上り者の商人の平べったい顔に浮かんで来た。帝政時代の古い振り時計ごしに鏡をのぞきこみながら、自分のようすをとくと検分している最中に、男爵夫人が戻ってくるらしい衣ずれの音がした。彼はさっそくもとの姿勢にかえった。

一八〇九年ごろには定めしみごとなものだったろうと思われる小さなソファに腰をおろすと、男爵夫人は肘掛け椅子を指さして、クルヴェルにすわるようにと合図した。肘掛け椅子の腕木は先の方が青銅色のスフィンクスの頭になっているのだが、塗料がまだらにぼろぼろはげ落ちて、ところどころ生地の木の色が見えている。「ずいぶん警戒をなさるようだが、奥さん、これがそのなんなら、さいさきよしというんでぞくぞくするところでしょう」彼女はそう国民軍の士官をささげった。

「いや、それじゃことばが弱すぎます」と、右手を心臓のあたりへ持ってゆきながら、——女が冷静にそんな眼つきを見たら思わずふき出してしまひまきましているが、眼玉をぐるぐるまわしてみせた。「恋人ですか。なるほど、恋人とね。むしろ恋に狂う男といっていたらだいたいですな。……」

二

「まあ、お聞きください、クルヴェルさん」と、男爵夫人は真剣だから笑うどころの騒ぎではなかった。「あなたは五十歳でいらっしやる。で

すからエロにくらべたら十ばかりお若いことはわたくしも存じておりますけれど、わたくしぐらいの年配になりますとね、女の色恋の沙汰は相手の殿方に、美貌とか、若さとか、世間の評判とか、才能とか、何かしらはなばなし、わたくしども女が年甲斐もなく、われを忘れて打ちこむほどの取柄がないと、世間の人もなるほどといってくれませぬのよ。よしんばあなたの年収が五万フランにもせよ、お歳がお歳ですから、せつからあなたの財産も帳消しですわ。そういうわけですからあなたは、女がこんな場合に望むものを、何一つ持っていないらっしやらない。……」

「ところが恋は？」国民軍の士官は立ちあがって、二、三步前へ出た。「その恋たるや……」

「いいえ、あなたのは執念です」と、男爵夫人は、こんな、バカげた話はいいかげんで打ち切りにするつもりで相手をささげった。

「さよう、執念と恋ですがね。だがもつとましなものもあるんですぜ、権利という……」

「権利ですって？」そう叫んだエロ夫人の顔は、さげすみと憤りで崇高になった。「けれどこんな調子じゃ、いつまでたってもらちがあきませんわ。それにわたくし、ああいうことできていただいたわけてはございませぬもの。あんなことがあったればこそ、おたが親戚同士の間柄でありながら、ご交際も遠慮していただいている始末ではございませぬか。……」

「そうでしたか、私はまた……」

「まだそんなことをいってらっしやる。人妻でありながら、恋人だとか恋だとか、いやらしい

ことをいってようすから、——軽々しい、のんきすぎるようすから、守るべきところはないじょうぶ守れると思っていることが、おわかりになりませぬの。わたくしちつともこわくありませんわ。こうして一つ部屋にこいっしよにいてとかやくいわれたからって、平気ですわ。これが弱い女のふるまいでしょうかしら。きょうきていただいたわけは、よくくわかっていらっしやるんですのに」

「それがわからないんでしてね、奥さん」と、クルヴェルは興奮せ顔でいった。

彼は口をとがらせて、また、もとどおり椅子に腰をおろした。

「では、どちらにもいやなことですから、はしよって申し上げましょう」といいながら、エロ男爵夫人はあらためてクルヴェルの顔を見なおした。

クルヴェルは皮肉たっぷりなえしやくをした。同じ商売のものがそのあいきょうのあるえしやくを見たら、なるほど昔地方まわりの注文とりをやっていただけのことはあるといて感心するに相違ない。

「うちではお宅のお嬢さんを、せがれの嫁にちよくだいたいしましたが、……」

「これがやり直しのできるものでしたらねえ。……」

「こんな結婚はするんじゃないか。こうおっしやるのでしょう？」と、男爵夫人は早口に答えた。「それにしたって、何もおこぼしになることはないじゃないか。せがれはパリ

でも一流の弁護士ですし、この一年来代議士にもなっています。代議院の初舞台がかなり評判だったので、やがてそのうちには大臣にもなるだろうというわけです。ヴィクトランはこれまでも二度、重要法案の精査委員に指名されていきますし、本人さえそのつもりだったら、りっぱに破毀院わくごういん 判断所はんぱんじょの最高級さいこうきゅうの検事にもなれています。ですから、先に見込みのない婿を持つてるなどと、かりにもおっしゃるようですと、

……」

「私が、仕方なし扶助ほつじゆしてやつてる婿殿なんですからね」と、クルヴェルは引きとった。「そいつがどうも、私にいわせるといよいよ困ったことなんでしてね、奥さん。持参金として娘にやった五十万フランのうち、二十万はご子息の借金払いに消えてしまった。なんの借金か知りませんがね。……それとご子息さんの家のもつばらしい飾りつくだ。五十万フランもかかった家だが、いちばんいいところを自分が占領してるから、家賃といつても一万五千フランそこそこしかあがらないうえに、こいつが二十六万フランの抵当にはいってる始末。……家賃のあがりて利子の払いがどうかというところですが、今は娘に、もの二万フランもやることになりまますかな。ところでうわさによると私の婿は、三万フランずつももうかっていた裁判所のほうを二の次にして、いよいよこれから代議院の仕事に打ち込むんだそうですね。……」

「それもやっぱりクルヴェルさん、枝葉の問題

で、本題から離れてしましますわ。けれどもまあ、そのへんでそのお話は切り上げていただくためにちよつと申し上げますが、もしせがれが大臣になって、その口入れであなたが四等レジオン・ドヌール勲章を貰い、パリの参事会員に任命されるとしたら、昔香料商人だったあなたとしては、何もおっしゃることはないじゃございせんか。……」

「ははあ！ そろくするだろうとおもいましたよ、奥さん。私は香料屋です。どうせそりゃ商人で、むかしは扁桃練油やオード・ポルトガルおどりけや香や頭痛香油の小売商人だった私だ。一人娘をエロ・デルヴィー男爵さまのご子息に片づけたんだから、もちろん、ありがたく思わなくちゃならないところでしよう。なにしろ娘も男爵夫人になるんですからね。まったく摂政時代の話、ルイ十五世ルイ十五世「ルイ十五世時代のクルヴェル窓物語まどものがたり」ユグ廷の淫蕩な生活を叙した 歴史時代の話でさあ。けっこうなことです。……一人娘をかわいがることじゃ、これでも世間のどの親にだって負けやしませんや。セレスティヌセレスティヌがかわいばっかりに、よけいな兄弟をあれに持たせたところから、パリの不便なやめ暮しにも眼をつぶつて我慢してきたんです（しかも男盛りのときですぜ、奥さん）だがはつきりとご承願ごしょうがんしたいのは、そんなふうに娘をめぐらかわいかりにかわいがつてもですな。私は自分の財産をご子息のためには使いませんよ。どうもその使い方が、昔商人だった私の眼にちとはつきりしないんでしてね」

「なんならこれからでも商務省へいらして、

もとロンパール街の薬屋だったポビノさんにお会いくださいませ」

「私の知合いですよ、奥さん」と、商売をよした香料商人はいった。「そのわけは、この私です、セレスタン・クルヴェルはです、もとセザール・ピロトーじいさんの手代頭てしろでしてね。じいさんの店の株を買ったというわけなんです。このピロトーというのがポビノの舅にあたるので、ポビノはその店じゃただの平手代でした。ところで、そんな昔の思い出話の口を切るのはいつもきまつてポビノのほうなんでしてね。というのも先生、（これがまあ、あの男の取柄なんです）われわれのように年収六万フランもある人望家に向かうと、尊大ぶつたふうは見せないんですよ」

「それじゃ、あなたが摂政時代ということばで形容なさることは、めいめいが持ち前の値打のままでとおる時代にはもはや通用しないんじゃないじゃございせんか。だからこそ、あなたもお嬢さまをうちのせがれにくだすつたんではありませんか」

「この結婚がどんなふうになつたのか、あなたはお存じじゃないんだ。……」と、クルヴェルは叫んだ。「まったくもって、やめ暮しがつていうやつは！ あんな放埒はなづかをしなかつたら、セレスティヌもいまじぶんはポビノ子爵夫人でいられたんだが」

「でも、くどいようですけれど、すんじまつたことをとやかくいうのは、もうよそうじゃありませんか」と、男爵夫人はきつぱりと、「それよ

りもお話は、あなたの冊に落ちないふるまいにわたくし不平がございますの。うちの娘のオルタンスはりっぱに結婚できたのです。その結婚はただもうあなたのお話一つでどうにもなるのでした。わたくしはあなたのお寛大なお気持ちに信頼をおいております。これまでついでに、お夫以外の殿方のことなんぞ考えたこともない女の気持を、よくくみ分けてくださるだろう。自分をつまずかせかねない人を避けようとする、女にとつてはほんとによんどころない事情もよく察してくださるだろう。そうしてそこはなんといつても親戚のおめでたなんですから、オルタンスと控訴裁判事のルバさんとの縁談にはさだめし喜んで口ぞえをしてくださることだろう。こんなふう考えたのでした。……だにあなたはこの話をぶちこわしておしまいになった。……」

「奥さん、私はただ正直にやったまでなんです。がね。じつはオルタンスさんに持参金として与えられるという二十万フランが実際に支払われるものかどうか、ききにきたものがあるんですよ。それにまあ返事をしたわけなんです、が、そいつをことばどおりにいってみると、こうなんです。『それはちよっとうけあいかねる。ユロ家はヴィクトランが私の娘の婿になるとき、それだけの金を分けてやると約束したが、いっこうにそんなようすもないうえに、当人のヴィクトランがすでに借金があった。それにユロ・デルヴィー氏があすにでもなくなられたら、あとにのこる奥さんは食うにも事を欠くだろうと思

うがね』——とまあ、そう答えたわけなんです。がね、奥さん」

「わたくしがあなたのために妻としてのつとめにそむいていたら」と、ユロ夫人はじつとクルヴェルを見つめながら、「そんな返事はひかえてくださつたでしょうか。……」

「そんなことをいう権利はなかったでしょうな、アドリーヌさん」と、この珍妙な恋人は、男爵夫人のことばをささげつて叫んだ。「その持参金は私の紙入れから出してさしあげられたことでしょうかね。……」

ただ口先ばかりではないということを見せるつもりなのだろう、そういって肥つちよのクルヴェルは、片膝をつくとユロ夫人の手に接吻した。見ればユロ夫人は相手のことばにおびえて口も利けないでいるのだが、早合点の彼はそのようすをちゆうちよしているせいで考えた。

「娘を幸福にしてやるために、……貞操を犠牲にする。……おお、立ってください、あなたでないとベルを鳴らしますよ」

香料商人あがりの男はやつと不承不承に立ちあがった。その場の光景がじつにへんてこだったので、すっかり怒って、例のもつたいぶつた姿勢にかえってしまった。男というものはほとんどみんな、ある好みの姿勢を持っている。そういう姿勢をとりさえすれば、天から授かったいろんな自分の長所がはつきり人の目につくにちがいないと思うのである。クルヴェルはどんなようすをするかという、ナポレオン式に腕を組む。そうして顔をちよつと横に向ける。眼

は、画家が彼の肖像を描くときにさせるように、すなわち眼と同じ高さのところを見るのである。

「あんな男に貞操を守るとは」と、いかにも芝居じみた、憤慨にたえない調子で、「あんな道楽……」

「夫にです、それだけの値打のある夫にです」と、ユロ夫人は聞きたくないことばを相手にいわせまいとしてクルヴェルをささげつた。

「ところで、奥さん、あなたはお手紙で私にこいとおっしゃった。私がなぜあんなことをしたか、そのわけを知りたいとおっしゃる。私はまったく見ていてむかつ腹がたつてくるんですよ、あなたのその皇后さまみたいなようすが。その人をバカにしたようなところが。それからその……軽蔑が！ 私を黒ん坊だともいうんですかね。くり返して申し上げておきますが、実際のところ私には権利があるんですよ、その……あなたに言いよつていいだけのね。なぜかっていうと、……まあよしまししょう、あなたを愛するだけに、私はいうに忍びない。……」

「おっしゃってください。四、五日すれば、わたくしも四十八になりますもの、へんに貞女ぶるのはバカげていますわ。おしまいまでちゃんとうかがいますから。……」

「それじゃあなたは貞淑な女として、——どうも私にとつちやあいにく話なんだが仕方がない、貞淑な女としてですね、けつして私の名前を持ち出さない、私が秘密をもらしたということを誰にもいわないと約束してくれませんか。……」

「それが秘密を明かしてくださる条件なら、お名前は誓って誰にも申しません。主人にさえ申しません。主人といえは、お話をうかがっているうちに、いろんなお恥かしい所業がだんだんわたくしにもわかつてくることでしょうか」

「それはそうでしょう。なにしろ話は、あなたと、あなたの旦那さんのことだけなんだから。」

「……」

ユロ夫人はおおくなった。

「いやまったく！ あなたが今でもユロさんを愛しておいでなら、これを聞けばいいさう苦しいわけですね。いっそお話ししないでおきましようかね。……」

「おっしゃってください。あなたは妙なことをおっしゃった上に、しつこくわたくしのような歳ものを苦しめていらっしやる。——自分がそうするのは当り前の話だということを、わたくしの眼に証拠だててくださるのださうですから、かまわずおっしゃってください。わたくしはただもう娘の身を固めてやりたいんです。そうしてから、……安らかに死にたいんです」

「それが……」

「わたくしが？」

「さよう、美しくして気高いお方！」と、クルヴェルは叫んだ。「まったくひどい苦労だったねえ。……」

「おだまりなさい、そうして出ていってください。でなければ、ちゃんとした口をおききなさい。」

「い」

「ご存じですか、奥さん、ユロ氏と私がですね。どんなふうにして知合いになったか。……われわれの女のところでですよ、奥さん」

「まあ！……」

「われわれの女のところでですよ、奥さん」と、安芝居のせりふみたいにくり返したクルヴェルは、右手で身振りをするためにせつかくの姿勢をくずしてしまつた。

「へえ、それで？……」と、クルヴェルがひどく驚いたことに、男爵夫人はおちつきはらつたものだった。

つまらない動機から人を誘惑しにかかるものには、相手の崇高な気持はわからない。

「私はこの五年来やもめ暮したが」と、クルヴェルは長物語をするような調子でやり出した。

「むやみとかわい、くたまらない娘のたれを思つて再婚の意志もなし、そのじぶんとでもきれいな納手を使つていたけれども、やっぱりこれも、自分のうちで妙なことになるのがいやだったので、十五になる小さな女の職人を、まあ世間でいうとおり、その女の家財道具のなかへ置いてやりました(妻に野家を持)。それが、また驚くほどの美人なんです、白状すると、まったく夢中になるくらい惚れこんでしまつたんですよ。まあそういつたわけで、奥さん、国もとから人もあろうに叔母を呼び寄せましてね、(お袋の妹)（お袋の妹です）そのかわいいうつた身分としてほできるだけすなおにしているように監視を頼んだわけなんです。

す。なんてつたらしいのかな、……伊達ですばら……じゃない、不道德だ。不道德的な身分としてね。……ところでその娘は、どう見ても性分が音楽に向いていそうなので、師匠につかせて、ちゃんと教育してやりました。（ほんやり遊ばせておくのは大禁物ですからね）それにまた私は彼女の父親であり恩人であるとともに、ええと、……いいかけたついでに、そのう、情夫であることを望んだので、つまり一石二鳥、——

こちらの親切にいいほだされて、というわけですかね。五年間というものは、私は仕合せでした。彼女の声たるや、芝居小屋の金箱という声なんです。あれは女デュブレ(当時の有名なオペラ役者)だといふよりほか、私には形容できません。年に二千フランかかりましたよ。それも歌劇女優としての腕をみがかせることばかりにです。おかげでこつちも音楽氣違いにさせられて、彼女と私の娘のためにイタリヤ座に一つ座席をとつておくような始末でした。そこへ二人をかわりばんこに連れていったもんです。きょうはセレスティヌ、あすはジョゼファといったあんばい。……」

「まあ、あの有名な歌劇女優なんですか。……」

「そうですよ、奥さん」クルヴェルは得意満面だ、えに私のおかげです。……さて、この小娘が二十歳になったとき、——一八三四年でしたが、もうだいじょうぶこの娘も私にくつついて永久に離れることはあるまいと思つたうえに、私もバカにその、弱くなりましてな。何かこの

子の気がまぎれるようなことをしてやりたいと思つて、ジェニー・カデイーヌという小さなきれいな女優と会うのもだまつてほつておくことにしてやりました。この女優の運命がまたジョゼフアといくらか似たところがあるんでしてね。こんにもあるのもひとえにこれ、とてもなみなみならぬ丹誠で育ててくれたある保護者のおかげなんです。その保護者がほかでもない、ユロ男爵なんです。……」

「存じておりますわ」と、男爵夫人はちつとも変わらないおちついた調子だった。

「おや、ほほう！」クルヴェルはいよいよもつてびっくりしながら叫んだ。「なるほど！　ところであの人でなすが、ジェニー・カデイーヌを十三の時からかこつたことを知ってますか」

「へえ、それで？」

「ジェニー・カデイーヌがジョゼフアとおんなじように二十歳になつて、おたがいに友達になつたじぶん、男爵はルイ十五世がド・ロマン嬢(十二歳の若年でルイ十五世の妾にさせられた女)にむかつて演じたような役をちょうど演じていたわけなんです。あれは、一八二六年来のことだから、あなたにしても今からみると十二若かつたのに。……」

「いろいろわけがあつて、ユロの思うとおりにさせていたのです」

「奥さん、そういう心にもないうそだけできつと、あなたの犯した罪はみんな消えてしまひますよ。そうしてあなたのために天国の門が開かれますよ」と、クルヴェルはやりかえしたが、そのえんきよくな調子に男爵夫人は顔が赤くな

つた。「そういうことは奥さん、ほかの人にはいふんですね。だがクルヴェルじいさんにはいけない。このじいさんは、いいですか、あなたのあの非道なご亭主とめいめい女をそばに引きつけながら、しょっちゅう飲めや歌えやの騒ぎをやつたからしぜんいろいろな話も出るというわけさ。あなたの値打というものは先刻承知なんです。彼はときたま、そろそろいい気持になつてくると、あなたのいろんな美点をこまごまと私に聞かせながら、自分で自分を叱つたもんですよ、まったく！　私はよく知ってます、あなたは天使のような人だ。二十歳の娘とあなたと、さあ、どつちだつていえば、道楽者はちよつと考えるかもしれないが、私なら二の足はふまないな」

「あなた！……」

「いや、もうやめます。……だが奥さんはりつぱで清い人だからご存じないが、亭主というやつは一度ほろ酔い機嫌になつたらさいご、かわい女を前において、女房のことをあれこれしゃべり立てるもんでしてね。女どもがまた、そいつを聞いて笑ふこと笑ふこと」

ユロ夫人の美しいまつげにたまつた羞恥(はづか)の涙を見ると、国民軍の士官はぎつくり言葉をとんでしまつた。そしてはや、もとの氣どつた姿勢にかえることも忘れてしまつた。

「ところで最前の話だが、われわれ、男爵と私は、めいめい自分の女をおして懇意になつたわけなんです。放蕩者(ちやうち)のたとえにもれず、男爵はひどくあいきょうがあつて、しかもまったく

の好人物だ。いやもう、すっかり気に入りましたよ、あのおどけた男が。……それに、いろいろと面白い遊びを工夫してくれたり。……がまあ、ここいらで、そんな面白い話はよしにしましよう。……二人はまるで兄弟のようにになりました。……けしからん男で、ぜんぜん撰政時代式ですな。しきりと私を墮落させようとしたり、女についてのサン・シモニスムのお説教をした

り、(ルイ十四世時) 大人名や青胴着の殿さまたち(代の大貴族)

のようすを教えこんだり、いろいろつとめたものですよ。だがいにくとそれ、私は子供のできる心配さえなかつたら女房にしてもいいほどの例の少女をかわいがつていましたからね。いい歳をしたおやじ同士のあいだです。それも仲のいいことがちよつと、……ええと、ちよつどわれわれみたいであつてみれば、おたがいの子供を結婚させようかというような考えが、自然浮かんでくるのも、あなたがむりじやありますまい？　彼の息子と私の娘のセレスティーヌが結婚してから三月たつてからです。ユロは、(な)んでまた、あの男の名前なんぞ口に出すんだらう。あの恥知らずめ！　あの男は私たち二人をだましたんですからね、奥さん。……) ええと、あの恥知らずは、私のかわいいジョゼフアを横どりしちやつたんです。あの腹黒いやつは、いよいよもつて驚異的な人気を呼んできたジェニー・カデイーヌが自分をそでにして、ある若い参事院議員と、それからある芸術家に、(二人とはどうです！) 参つてるのに気がついていたんですね。そこでとても美貌な私のかわいらし

い女を横どりしちゃったんです。たしかあなたもイタリヤ座で私の女を見たことがあるはずですよ。あの男の信用で入座させられたんですがね。あなたのご亭主は私ほど利口じゃありません。私はまた、まるで五線紙みたいにきちんとしてますがね。(これまででも先生、ジェニー・カディーヌからはいいかげんしぼられてるんで、なんでも年に三万フラン近くつきこんでましたぜ)とここで、よござんすか、あの男はジョゼフアのおかげでいよいよ破産しますよ。ジョゼフアはね、奥さん、ユダヤ人です。名前にはミラーっていうんです。(これはヒラムの換置綴ですがね)つまり後日この女を探すときの手掛りになるように、というへブライ語の符牒なんですな。というのは、ドイツで棄てられた子でしてね、(いろいろ調べたところ、ある金持のユダヤ人の銀行家の私生児ということがわかりました)芝居というもの、ことにジェニー・カディーヌや、シヨント夫人や、マラガやカラビーヌなんぞがこの、せっかく私が律儀な安直な道を踏ませておいた小娘に、老人どもを扱う方法を教えたんだおかげで、昔のユダヤ人の本能がぐんぐん芽を吹いてきたんです。黄金と宝石を好む本能、黄金の子牛を拝む本能がね。名前が売れてきたこの歌劇女優は金の匂いにつがつするようになって、金持になりたい、うんと金持になりたいとそればかり考えてるんです。だからあの女は、人があの女のためにばつばと使う金を一文も使いやしない。彼女はユロ先生を見立てて腕だめしをやったんですな。き

れいにしぼられてしまった。いや、しぼられたっていうのは、身代限りということですよ。ケレル家のさる男や、デグリニョン侯爵、これは二人ともほかの名も知れないような崇拜者を別にしてジョゼフアにのぼせ切ってるんですが、こういう連中と張り合つたすえに、かわいそうに今じゃあの、芸術を保護してる、とても大金持の公爵に、みすみすジョゼフアをまき上げられてる始末です。なんていいましたっけ、あの公爵は……あの一寸法師は……そうそ、デルーヴィル公爵だ。あのお大名さまは、ジョゼフアはおれだけが持つてるんだって号していますよ。一流娼婦仲間じゃそのうわざで持ち切りなんだけれども、男爵はいっこうにご存じない。この社会にも第十三区(当時パリの行政区画は十二区であつたところから第十三区といへば暖味架空の場所)というものがあるんでしてね。知らぬは亭主ばかりなりというけれど、まったく知らぬは色男ばかりなりだ。これだけいたら、私の権利というのが腑に落ちたでしような。あなたのご亭主さんは、奥さん、私の幸福を奪つたんです。私がやもめになつてからのただ一つの喜びを奪つたんです。そうだ、もし私があるな老いぼれ軍人に出くわすような不幸な目にあわなかつたら、今でもやっぱりジョゼフアは私のものでしたでしよう。なぜといてごらんなさい、私はけつして芝居になんぞ出しゃしなかつたでしようからね。ジョゼフアにしたって、だれの眼にもつかず、おとなしく私一人を守つていたでしようからね。ああ、八年前のあの子

の姿をひと目あなたに見せたかつた。やせぎすで、たくましく、よく人がいうがアンダルシヤの女みたいに、山吹色のつやつやした肌で、黒い髪の毛が纏子みたいに光っていて、とび色の長いまつげの、キラキラよく光る眼だった。公爵夫人みたいに立居振舞いに気品があつた。貧しさが教えた質素なところ、まるで野生の牝鹿みたいな清らかなしやかき、愛くるしさがあつた。ユロ氏が悪かつたばかりに、そういう魅力も清らかなところも、みんな狼をつるわになつてしまった。五フラン金貨をつり上げるわになつてしまった。人がいうように、あの小娘は淫婦どもの女王さまですぜ。しかも今じゃ男を手玉に取るんですぜ。まったく何一つ知らなかつた女が、——だいいちそんな言葉さえ知らなかつた女が!

そういって、昔香料商人だった男は、少しばかり涙のじみ出した眼をこすつた。そのうそや偽りでない、心からの悲しみに動かされたのか、ユロ夫人も深いもの思ひからさめた。

「そこでです、奥さん、五十二という歳で、そんなような宝物が二度と見つかりますか。こんな歳になると、色恋の沙汰も年に三万フランはかかるとしてね。この金高はあなたのご主人のを見て知ってるんですが、私はセレスティーヌがかわいくなって、とてもあの女をみじめな目にあわす気にはなれません。はじめてお招きにあつたあの夜会ではじめてお目にかかつたときだ、私は、ユロがけしからん話で、なんでもたジェニー・カディーヌみたいな女をかこつてお

くのか、どうしても臍に落ちなかったものですよ。……あなたはまるで皇后さまみたいなようすをしていた。……今だって三十にも見えませんよ、奥さん」と、彼はまたつつけた。「とても若く見えます。何しろおきれいだ。誓っていいですがね、私はその日、心底から動かされてしまったんです。私は胸のなかでこういいましたよ。『もしおれがジョゼフアというものがなかつたら、ユロじいさんはなにしろあの奥さんをしてかえりみないからには、まるで手袋みたいにじっくりおれにはまるだろう』とね。いや、これは失礼！ どうもちょいちょい昔のくせが出ましてね。香料屋がときどき顔を出すんで弱ります。こういうくせがあるので、代議士に打って出たいにも出られない始末でして。——というわけで、男爵にじつに他愛もなくいっばいくわされたとき、それもむりはないので、われわれ不良老年どものあいだでは友達の色女になんぞけつして手を出さないのが当り前なんですからな、——私は、そんならこつちもやつ細君をひっそらつてやるぞつて、心に誓ったんです。理の当然でさあ。男爵だつてまさか一言もありませぬから、だいたいようぶわれわれは罰しられることはない。で、それとなく私の気持をあなたに打ち明けてみたんだが、いい出すかい出さないうちに、まるでひぜんかきの犬みたいに門のそとへおぼり出されてしまった。しかしあなたはそうやってかえつて、私の恋心をいやがうえにもあおり立ててしまったんです。恋心といつていけなければ執念ですが

ね。まあ、いずれにしる、あなたは私のものになるんです」

「どんなふうにしてすの」

「それは私にもわかりませんがね、とにかくうなるんです。まあ考えてもごらんない、奥さん。たった一つことを脇目もふらず思いつめてるあほうな香料商人は、(それも隠居おやじだ!) あれやこれやとぬかりなくいろんなことを考えてる才子よりも、ずつと強いもんでず。私はあなたに首つたげなんだ。そうして、あなたを手に入れることが私の復讐になるんだ。ちようど二へん惚れるようなもんです。こうと覚悟をきめたんだから、あなたにも腹藏なくざつくばらんに話している。『わたくしはあなたのものになりませぬ』こうあなたがおっしゃるとおなじように、しごく冷静に、あなたと話をしている。つまりことわざでゆくと、カルタをおおびらにテーブルへならべて勝負をしているんです。そうだ、いつかときがくればあなたは私のものになる。……なんの! よしんばあなたが五十歳になつて私の気持に変わりはない、やっぱりあなたは私のかわいい人だ。とにかくそうなるんですよ。なせつて、私はあなたのご主人からいっさいを期待していいんだから」

ユロ夫人は、この謀はかどに巧みなブルジョワをじつと見つめた。気でも狂つたのではないかと思われるほど、恐怖にすわつた眼つきだった。彼は口をつぐんだ。

「あなたがいえとおっしゃつたからだ。あなた

は頭ごなしにこの私をバカにしかかかつて、いえるものならいつてみるといわんばかりの顔をなすつた。だからつい、いっぢまつたんですよ」と、いましがたしゃべつたことが乱暴だったので、弁解する必要を感じたのか、そうつけ足した。

「ああ、私の娘は、娘は!」と男爵夫人は瀕死瀕死の病人のような声で叫んだ。

「いや、私もなにがなんだかわからなくなつた。ジョゼフアを横どりされた日、私はまるで子供を取り上げられた牝の虎みたいたつたつて。……早い話が今のあなたみたくないようすでしたよ。お嬢さんか。お嬢さんは私にとつちや、あなたを手に入れる方便でしてね。さよう、いかにも

私はお嬢さんの縁談に水をさしました。……しかもあなたは、私の援助なくしてはどうあつてもあの人をお嫁にやるわけにいきませぬまい? オルトアンズさんがどんなにおきれいで持参金というものがなくてはね。……」

「ああ、おっしゃるとおり!」男爵夫人はハンケチで眼をおさえた。

「ひとつ男爵に一万フランばかりねだつてみるんですよ」と、クルヴェルはことばをついで、また例の姿勢になつた。

彼は間をおく役者のように、ちよつとのあいだ待つていた。

「もつともそんな金があつたら、今度ジョゼフアのかわりになる女にやつてしまふでしょうがね」と、意味ありげに声を落して、「いったい、ああい道へはいりこんで中途でとまるもので



しょうかね。だいいち、あれじゃあんまり女ずきすぎる。(王さま(ルイ・フィリ)の言い草じゃないが、何事にも中庸政策ありですよ) おまけにうぬぼれが強いときている。美男子ですからね。遊びのためにはあなた方みんなを一文なしにしかねない人だ。それにもうそろそろ落ちぶれかけましたね。ほれ、私がお宅へ参上しないようになつてから、お宅の客間の道具類ももっとも新しくならないじゃありませんか。そこいらにはつてある布地の縫目隠しのはころびが、いっせいに『不如意』つてことばを噴き出してら。同じ貧乏にしても、身分のいい人の貧乏ほど恐ろしいものはない。それをまざまざと見せつけられて、びっくりしないような求婚者があつたら、ひとつどんな男かお目にかけたいもんですよ。店持ちだっただけに、そのへんのことがよくわかるんでしてね。これは本当の金持か見かけ倒しの金持か、それをちゃんと見破るのに、パリの商人のひとにらみほど利くものはほかにありやしない。……あなたのところには一文もないんでしょ」と、低い声で、「何を見てもちゃんとそう書いてあるんだが、——あの下男の着物にさえもね。どうです、あなたに知れないようにしてある恐ろしい秘密を明かしてあげましようか」

「もうたくさんです。たくさんです」ユロ夫人はハンケチがびっしょりするほど泣いていた。「じつはね、私の婿は、父親のユロさんに金をみついでるんですよ、さっきの話のはじめにユロ息さんの暮し向きについて申し上げようと思

つたことが、じつはこれなんでしてね。だが私は、娘のためにならないようなことはさせませんから、……ご安心なさい」

「ああ、オルタンスを片づけて、そうして死んでしまいたい。……」と、不幸な女はつい頭が乱れて、こういった。

「ついでにはです、ここにいい方法があるんだが」

ユロ夫人はクルヴェルを見まもつたが、その希望にかがやいたようすがまたたく間に彼女の顔つきを変えてしまった。クルヴェルが普通の人間なら、そのすみやかな変化を見ただけでも胸を打たれて、バカバカしい計画を放棄してしまつたにちがいない。

### 三

「あなたの美しさは、まだここ十年はだいいじょうぶでしょう」と、例のもつたいぶつたかつこのクルヴェルはつづけた。「少しは私にも親切にしてくださいるのですよ。そうすればオルタンスさんもお嫁にゆかれます。いまもお話ししたとおりで、こういう取引き契約をしごく無遠慮に申し出る権利はユロさんから貰つたんだから、まさかユロさんにしたつて腹は立てません。じつは三年まえから資本を有利に運転しているの、——というのもそれまでのような無分別なことは、したくてもできない始末でしたからね。いまのところ財産を別にして、もうけたのが三十万フランあります。これはあなたにさしあげます。……」

「出ていってください。出ていってください。そうしてもう二度と私の前にこないでください。オルタンスの縁談について、あなたがなぜあんな卑怯なまねをなすつたか、私はそれをはつきり知る必要があつたのです。……いいえ、卑怯ですとも。……」と、クルヴェルが何かいおうとするのにおつかぶせて、「その必要がないければ、かわいそうな娘に、美しい無邪気な娘に、どうしてそんな怨みがかぶさつてくるのをほっておくのですか。……私の親心に食い入るの必要がなかったら、あなたのお話なんぞうけたまわりやしません。うちへなんぞきていただくやしません。三十二年も守りつづけた女の誇りと操は、クルヴェルさんなんぞのおどかしでくずれるようなものではございません。……」

「そのクルヴェル氏たるや、サン・トノレ街は『ばらの女王』の看板をかけましたるセザール・ピロトーのあとを引きついで香料商人あがり」と、冗談半分、「かつては区の助役を相勤め、国民軍大尉、五等レジオン・ドヌール勲章佩用者といえは、先代のピロトーそっくりでございましてね。……」

「ユロは」と、男爵夫人はまた口をきつた。「これまで二十年のあいだ変わらずに私を愛しつづけて何一つ不信のおこないもなかったんですから、自分の妻にあきがきたのもべつにふしぎではありません。しかもこれは私だけの問題ですもの。けれどわたくしを裏切つてもやっぱり、隠せるだけは隠していたではございませんか。だってわたくし、主人があなたにかわつて